

関西大学独逸文学会研究発表概要 (第104回研究発表会)

1. 中高ドイツ語における接続詞について — dô と sô を中心に —

宮田侑季 / 工藤康弘

ドイツ語史において接続詞は大きく変化を被っている。その一端をとらえるべく、本発表では中高ドイツ語の dô と sô および初期新高ドイツ語における da と so を考察した。

まずニーベルンゲン（第1章～第15章）における dô は時の副詞としての用法が圧倒的に多い。これは副詞 da として現代語に受け継がれている。残りは時の接続詞としての用法であり、現代語の時を表す als, indem, nachdem に相当する。次に sô の主たる用法は副詞である。これより数としては少ないが、時・条件を表す接続詞としての用法がある。これには過去の一時点を表す場合（= nhd. als）と現在の条件を表す場合（= nhd. wenn）がある。またわずかであるが、「～のように」を意味する sô（= nhd. wie）も確認された。

次に dô と sô を形態的に受け継いだ da と so の用法をルター訳マルコ福音書（1546）を資料として考察した。da の用法を頻度順に記すと従属接続詞、副詞、関係文内の小辞、関係副詞である。従属接続詞としては過去の一時点を表す用法が主たるもので、現代語のような理由を表す機能はほとんどない。mhd. sô はこの時代、so, als, also という形で現れる。三者はときに交錯することもあるが、それぞれが独自の機能を獲得しつつある。als は da に比べ、過去の一時点を表す機能はまだほとんど持っていない。条件を表す機能は so よりも wenn が受け持っている。以上のように、ルターにおける接続詞は新旧の用法を併せ持っており、現代語へ脱皮する途上の姿を示している。

2. 文学作品の視覚化

—— 19世紀ビルダーボーゲンに見る文学作品 ——

宇佐美 幸彦

19世紀に大衆的なメディアとして、大量に発行されたビルダーボーゲンは、内容的には多くの分野を含むものであった。主要な領域を上げれば、時事的報道、宗教的教義の普及、教育的手段、大衆の娯楽（ゲーム盤、組立工作、着せ替え人形）、文学的作品などがある。今回はこの中で、文学テキストを含むビルダーボーゲンを取り上げ、文学的作品がどのように図示されているかを、具体例に基づいて検討した。ビルダーボーゲンで取り扱われている文学作品の原典は、小説、演劇、メルヒェン、抒情詩（民謡）などがあるが、一枚絵という紙面の分量からして、小形式の文学作品（詩とメルヒェン）が比較的多い。また時代的には19世紀のロマン主義の時代の作品が多い。報告では、生産地に従って、(1)ノイルピーン、(2)ミュンヒェン、シュトゥットガルトの二つに分けて、それぞれの特徴を明らかにした。

ノイルピーン・ビルダーボーゲンでは、全般的特徴として19世紀市民層のビーダーマイアー的世界観を指摘することができる。すなわち(1)小市民的家庭性、(2)キリスト教的道義、(3)「社会教育的」傾向である。この最後の教育の内容（とくに女性に対して）を詳しく見ると、①勤勉さ、②控えめな態度、つつましさ、従順さ、忠誠心、③キリスト教的信仰、④虚栄心の排除、⑤家庭性、⑥注意力、生活上の賢さ、⑦道義、まじめな態度、⑧無駄口や虚言の排除、⑨清潔さ、純潔さなどが強調されていることが判明する。

次に、ミュンヒェンおよびシュトゥットガルトのビルダーボーゲンの全般的特徴としては、(1)文化的分野に重点（時事問題を扱った作品は少ない）、(2)「教育的」傾向ではなく、文学的・娯楽的傾向、(3)一流画家の（署名入り）図版（大胆な構図、洗練された筆致）などを指摘することができる。